

令和 4 年 5 月 24 日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00613

研究課題名(和文)九州方言音韻現象における方言形成と方言崩壊の均衡性に関する研究

研究課題名(英文) A Study on the Equilibrium of Dialect Formation and Dialect Breakdown in Kyushu Dialect Phonological Phenomena

研究代表者

有元 光彦 (Arimoto, Mitsuhiro)

山口大学・国際総合科学部・教授

研究者番号：90232074

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：九州方言の音韻現象のデータ収集については、フィールドワークの計画は立案したものの、新型コロナウイルスの影響により実施することはできなかった。しかし、以前収集したデータに関する分析、及び方言形成・方言崩壊という斬新な観点からの理論的研究は大きく進展した。前者の言語データの記述については、宮崎県日南市、串間市、児湯郡西米良村・東臼杵郡椎葉村・西臼杵郡高千穂町の方言のテ形音韻現象をまとめた。また、後者の理論的研究では、テ形音韻現象に起こる方言崩壊プロセスを仮定した。テ形音韻現象を司る音韻ルールの適用環境に「特殊から一般へ」という性質が見出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

テ形音韻現象が、単にある方言の言語現象というだけでなく、それが九州方言全体で地理的な移行性分布を示していること、またその方言崩壊に「特殊から一般へ」という言語普遍的な特徴が発見できたことは、学術的に重要な意義がある。また、この言語現象を材料として、アウトリーチなどに利用できる小冊子を作成したことは、試験的ではあるが、今後社会的な貢献の可能性を持っており、それゆえ大きな意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：Regarding the collection of data on phonological phenomena in the Kyushu dialect, although a fieldwork plan was drawn up, it could not be carried out due to the impact of the new coronavirus (COVID-19). However, the analysis of previously collected data and theoretical research from the novel perspectives of dialect formation and dialect breakdown have made great progress. Regarding the description of linguistic data in the former, we summarized the te-related phonological phenomena of the dialects of Nichinan City, Kushima City, Nishimera Village in Koyu District, Shiiba Village in Higashiusuki District, and Takachiho Town in Nishiusuki District, in the Miyazaki Prefecture. The latter theoretical study also postulated the dialect breakdown process that occurs in te-related phonological phenomena. The application environment of the phonological rules governing the phonological phenomena was found to have the property of "from specific to general".

研究分野：言語学, 日本語学

キーワード：九州方言 形態音韻現象 テ形 タ形 方言形成 方言崩壊

### 1. 研究開始当初の背景

九州方言の音韻を対象とした従来の研究では、各方言の音声の種類や音韻体系のような静的な状態を記述したものはあったが、各方言内の音韻現象のような動態を記述したものはほとんど見られなかった。あったとしても、共通語との対応を基盤とした通時的な言語変化を示したものであって、1つの方言内での共時的な交替現象を取り扱ったものはなかった。また、言語地理学的な領域においても、個々の音声・音韻を対象としたものはあるが、音韻現象を対象としたものは見られなかった。さらに、方言形成論の観点に拡大して見たとしても、対象は単語といったレキシコン(語彙)のレベルに留まっているのが現状であった。

しかし、言語はレキシコンだけではなく、共時的な言語現象によっても構成されている。従来の研究は前者を対象とするものに偏り過ぎていた感がある。言語形成や言語崩壊といった共時的な動態を観察・記述するためには、後者を対象とする研究が必須である。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、方言形成と方言崩壊という概念からテ形音韻現象を分析することによって、音韻システムとしての方言の動態を解明するとともに、他のシステムである語彙や構文にまで、その概念を拡大適用し、汎用性のある説明理論の構築を試みるものである。

言い換えると、次の3項目である。

- 九州方言の音韻現象(テ形音韻現象)に関する詳細なデータ収集・記述
- 音韻システムにおける方言形成と方言崩壊に関する理論化
- 語彙システム・構文システムとの関連性の記述

### 3. 研究の方法

研究方法を上記「2. 研究の目的」～に沿って述べると、以下の通りである。

まずでは、九州方言の音韻現象の1つであるテ形音韻現象(「～て(きた)」というような動詞テ形に現れる特異な形態音韻現象)に関する未調査の言語データを収集し、詳細な記述を施していく。ここでは、テ形音韻現象を、それを司る音韻ルールの違いによって方言タイプに分類し、それが方言地図上で移行性分布を成していることを明示する。また、データ収集では、複数の方言タイプが接触すると考えられる地域を重点的に調査する。

では、の記述を参照しつつ、「そもそもなぜ方言形成と方言崩壊が均衡(共存)できるのか」「両者の均衡を保つ何かが存在するのか」という問題の解明はもとより、テ形音韻現象という世界に起こっている変化や動態を包括的に、かつ厳密に理論化していく。

では、テ形音韻現象が、すべての動詞に見られるかどうかといった、動詞の属性による違いがあるのではないかという問題を取り上げる。また、テ形従属節はいくつかの意味・機能を持つことが知られているが、この意味・機能の違いによって、テ形音韻現象の出現に違いは出ないかどうかといった構文的な問題を解明していく。

### 4. 研究成果

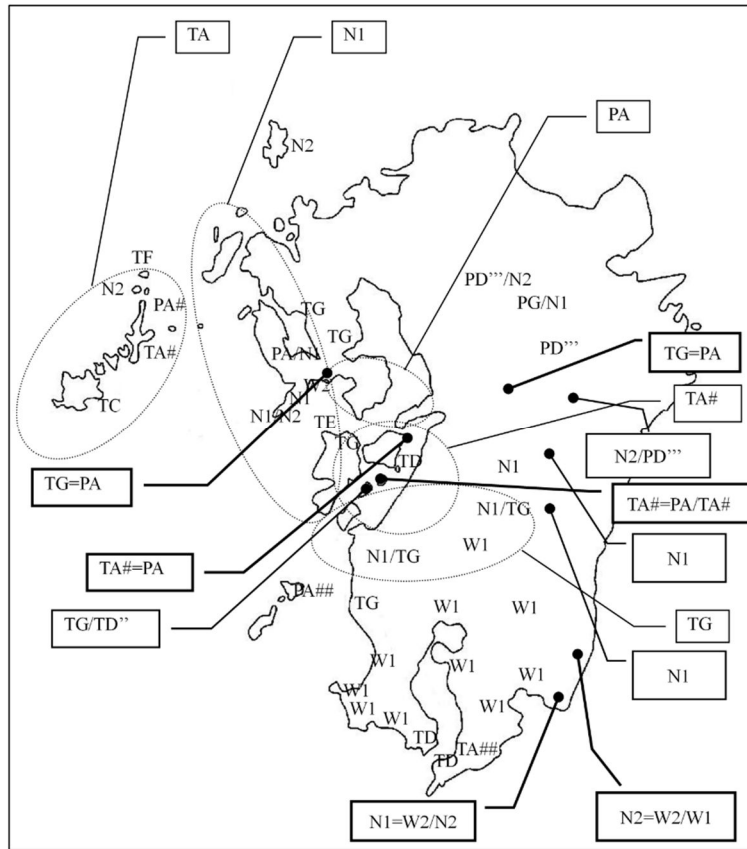
(1)九州方言の音韻現象のデータ収集については、フィールドワークの計画は立案したものの、新型コロナウイルスの影響により実施することはできなかった。従って、未調査地域の調査のみならず、動詞の語彙的な違いの問題や構文における問題に関しても、それらの言語データを収集・調査することがかなわなかった。

(2)テ形音韻現象の記述に関しては、以前フィールドワークによって収集した言語データを分析し、2本の単著論文(2019年1月、2020年1月)として公表した。対象とする方言は、前者の論文では宮崎県日南市・串間市、後者の論文では宮崎県児湯郡西米良村・東臼杵郡椎葉村・西臼杵郡高千穂町の方言である。

前者では、串間市方言、日南市方言がともに基本的には「非テ形現象方言」というタイプであることが判明した。これは、隣接する鹿児島県南部方言とは異なるタイプである。一方、後者では、西米良村・椎葉村・高千穂町方言がともに「非テ形現象方言」というタイプであることが分かった。また、高千穂町方言には「擬似テ形現象方言」というタイプも残っていることも観察された。

以上の記述を含め、現時点までに解明された方言タイプを方言地図上にプロットしたものが【図1】である。ここでは、長崎県五島列島から熊本県天草をわたり鹿児島県南部に至る1本の道が観察でき、しかもそこに方言圏論的な分布が見られる。すなわち、レキシコンのレベルだけではなく、音韻ルールから見た音韻現象においても同様の特徴が観察できることが判明した。

(3)テ形音韻現象と類似したものとして、タ形における音便現象があるが、両者が同じ現象であるのかどうかを分析したのものとして、単著論文(2021年3月)がある。結果として、両者は非常に類似しているが、両者が異なる方言タイプもあることが判明した。



【図1】方言タイプの分布地図

(4) 方言形成・方言崩壊に関する理論的研究は非常に進展した。特に、非テ形現象化と呼んでいた方言崩壊については、様々な仮説を立てることができた。

まず、単著論文(2019年1月)では、テ形音韻現象を司る音韻ルールを比較することによって、「全体性テ形現象方言」が崩壊していくプロセスを仮説として提示することができた。ここでは、方言タイプで示すと「タイプW1方言 タイプW2方言」、方言で示すと「典型(鹿児島方言タイプ) 日南市方言 串間市方言」という方言崩壊プロセスが仮定できた。

また、単著論文(2020年1月)では、「非テ形現象方言」「擬似テ形現象方言」の崩壊についても、方言崩壊のプロセスを仮定した。前者では「タイプN2方言 タイプN1方言」、後者では「タイプPD'''方言」への崩壊プロセスを仮説として示した。しかし、この時点では後者についてはあまり明確に記述することはできなかった。

すべての方言タイプにおける方言崩壊プロセスを仮説として提示できたのは、単著論文(2020年12月)においてである。ここでは、現時点までに仮定したすべての方言タイプの変化を方言崩壊という観点から見直している。その結果、「真性テ形現象方言」と「擬似テ形現象方言」が同様の方言崩壊プロセスを辿るという仮説を立てることができた。さらに、「真性テ形現象方言」「擬似テ形現象方言」「全体性テ形現象方言」においては、テ形音便現象を司る音韻ルールの適用環境に「特殊から一般へ」の変化が起こっているという共通特徴を発見することができた。

(5) 単著論文(2019年1月, 2020年1月, 2020年12月, 2021年3月)の初期バージョンを、研究成果報告書『九州方言の音韻現象における記述的・理論的研究』(2022年3月)としてまとめた。

(6) 今回の研究成果として公表した単著論文や研究成果報告書は、本研究の学界に重要な貢献をしたと考えているが、一方で研究成果の一般的な公開において、非常に複雑で専門的な内容をどうやったら理解してもらえるかという課題が生じた。そこで、今後への契機として、研究成果報告書『方言分析ノート』(2022年3月)を作成した。これは、テ形音韻現象というものを理解してもらうために、分析プロセスを段階的に追うことができるテキストのようなものとなっている。現時点では試験的なもので、今後修正を重ねたうえで、アウトリーチなどで利用できる形にしたいと考えている。ただ、これを作成した目的は、誰にでも理解可能な記述にすることで、今までに気がつかなかった音韻現象の本質を新たに見出すことにある。この意味で、本報告書は今後の理論的研究にも寄与するものと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 有元 光彦	4. 巻 158
2. 論文標題 九州方言におけるテ形音韻現象の崩壊について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語研究	6. 最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 有元光彦	4. 巻 69
2. 論文標題 非テ形現象・擬似テ形現象の崩壊に関する予備的考察 宮崎県北西部方言を対象として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 研究論叢（山口大学教育学部）	6. 最初と最後の頁 261-270
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 有元光彦	4. 巻 68
2. 論文標題 テ形音韻現象の崩壊に関する議論 宮崎県南部方言を対象として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 研究論叢（山口大学教育学部）	6. 最初と最後の頁 335-343
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 筑紫日本語研究会（編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 513
3. 書名 筑紫語学論叢	

〔産業財産権〕

〔その他〕

有元光彦（2022年3月）『九州方言の音韻現象における記述的・理論的研究』（平成30(2018)～令和3(2021)年度科学研究費・基盤研究(C)「九州方言音韻現象における方言形成と方言崩壊の均衡性に関する研究」(No.18K00613)・研究成果報告書，pp.1-90，単著）  
有元光彦（2022年3月）『方言分析ノート』（平成30(2018)～令和3(2021)年度科学研究費・基盤研究(C)「九州方言音韻現象における方言形成と方言崩壊の均衡性に関する研究」(No.18K00613)・研究成果報告書，pp.1-75，単著）

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------